



初/ALEF

- (A面) ① Sincro ② Ningen ③ Tsu-bana ④ Pachinko Breeze ⑤ Sarariman Shine
 (B面) ① Touche Pas A Mon Peul ② Leila ③ Nanji Desu Ka ④ Bachan No Tea Time ⑤ When Im Crazy Im Normal
 Kampei Record

なにしろ奇妙で、怪しげで、いわば根無しの草のようなサウンドである。だが僕は、その怪しさ、根無しっぷりが気に入っているのだ。

ALEFというグループは「音楽創造を終着点とせず、音楽を媒体とした、広い意味での創造性を探索し体現する集合住宅である。活動の核となっているのはサダトを中心とした4名のミュージシャン。他は「フリーメンバー」と称し、ダンサー、ミュージシャン、パフォーマ

ンス・アーティストが状況に応じて参加し、それぞれのカラーをフルに発揮する」というものだ。

こういうグループがレコードを作るということ自体が、おかしいといえはおかしいのだが、そうした思惑を越えて、彼等はずっとアッケラカンと活動しているようだ。

このレコードに顔を出しているメンバーは、スイス生まれでイラン国籍のサダト(サキソフォン、フルート、シンセサイザー、ヴォイス)、アメリカ人のデニス・ガン(ギター)、加藤英樹(エレキベース、ウッドベース)、石田和也(ドラムス、パーカッション)の4人の他に、トシコ(シンセサイザー)、ロミ(ヴォイス)の日本人女性が、別々に一曲ずつ参加している。国籍混合のインターナショナルな顔ぶれだ。

そして「ロック、フリー・ミュージック、ジャズ、無調音楽、そしてアジア音楽のコラージュともいうべき」と自称する演奏を行なっている。だから、トータル・ミュージックと思われるかも知れないが、僕は逆に「無国籍音楽」と呼びたい。属性がどこにも無いのである。

トータル・ミュージックとは、様々なジャンルの音楽の共通項を見出して統一を試みるか、または一定のベースを作っておいて、その上に異なる種類の音楽の諸要素を適宜に配置していくかで、いず

レコード紹介 □ ポピュラー

れにしても分母のある音楽だ。ところが、ALEFの場合には、分母が無くて分子だけが曲によって次々と変わっていく。やはり、根無し音楽なのである。根の無いことを否定的に見るべきではない。水面を静かに漂う藻の緑は鮮やかでもある。根無し草の美学がある。

もう一ついえば、通常、音楽の内面にはナショナルイテイがある。黒人ジャズと白人のそれとの違い、同じクラシックでもヨーロッパ各国の表情がそれぞれに表れている。作曲家の個性を越えて、民族のアイデンティティが居座っているのだ。ブリテイッシュ・ロックとドイツ・ロックもそうだし、エスニック・ミュージックまで話を及ばせば、もうキリがない。

ナショナルイテイが、インターナショナルな広がりを持たせているのである。ところが、ALEFのサウンドには、内面のナショナルイテイが聴きとり難い。あつても、極端に希薄なのだ。だから、二重の意味で根無しの無国籍音楽なのである。ちなみに、ALEF自身も、自分たちの音楽を「液体空間」と定義しているし、サダトのヴォイスは日本語、英語、そしてイラン語(フ)、曲名も各国語が入り混じる。

A面の①は全員で発声する声明風の音楽、②はギターが作るロック・ムードの音

上にジャズ・サクスが乗ったもの、③は日本の童謡「蓮華の花が開いた」を想わせるメロディー、などと異なる表情が次々と現われては消えていく感じだ。サダトのナレイション風ヴォイスが盛んに活躍するが、諧謔に満ちたものが多い。A⑤の曲名が、サラリーマンが輝やくのかと思つたら、「サラリーマン死ね!」だったとは!

B面はさらに面白く、千変万化。わりとメロディックだなと聴いていると、踏切の警報機がカン、カン、カンと鳴り出し、ゴォーッと列車が通り過ぎて行く、何事もなかったようにウッドベースが響くのは②曲目。③ではパフォーマンズ風の激しい遣り取りの後、教会の鐘が鳴り渡る。④のお茶の話は面白いが、そこはギターの擬似三味線ではなく、本物の音色が欲しかった。まあ、これは無国籍の論理で押せば、本物を出して決めるより、あえて偽物で作った方が良かったのか。

以上、必ずしも上手な演奏とは呼べないが、それ以上にユニークな着想と、新しい方向性を評価したい。無国籍音楽には、内部の風景は映らないけれど、情景がある。だから、これは情景の音楽といえるのだ。

(副島輝人)

by Teruto Soejima